

平塚柔道物語 7 3

上水東海大監督の魅力その2

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

全日本柔道連盟副会長の山下泰裕氏は、3年前のロンドン五輪で日本男子柔道の金メダルゼロと惨敗後、代表監督として再建に着手する井上氏のことを「康生は非常に充実し、成長している。その背景には上水という男がいることを忘れてはならない」と言われたという。それはどういう意味なのか。私なりに考えてみた。東海大では井上氏は上水監督の副監督をしているという関係で、上水氏の指導力や手法を身近に学んでいるということを山下氏は言いたかったのではないかと。そう考えてみると、私の頭に思い当たることが浮かんだ。それは、昨年（平成26年）8月の終わりに、ロシアで行われた柔道の世界選手権大会のこと。最終日の団体戦で日本男子が見事に優勝を納めた感動的な試合があった。決勝の相手はロシアである。会場には柔道の有段者でもあるプーチン大統領がその応援に駆け付け、ロシアの選手は、絶対に負けられないという空気一色であった。5人の選手の初めは、世界チャンピオンの海老沼選手であるが、向こうの応援団の熱気に圧倒されてか、負けてしまったのである。続いて勝つであろうと期待していた大野選手も敗退。5人の内の2人が負けるということは、残った選手に精神的負担をかけてしまうことになり、勝つ可能性が少なくなるのである。しかし、そこで奇跡が起こった。それは、後の3人の選手が何と全員一本勝ちをしたのである。見事な快挙であった。井上康生監督は、大会前から、最悪の場合、最初の2人、2枚看板が連敗することも想定していた。「残りの3人が取れば勝てる。絶対にその準備をしておけ」と言い渡しておいたという。常に危機感を持ち、最悪のことを考え、準備をして来た監督の指導法が功を奏し、逆転劇となったのである。この最悪のことを想定し、準備しておく手法こそ、東海大柔道部監督の上水氏の新しい手法であった。副監督の井上氏は上水監督の手法を学び、活用したのであろう。井上氏もある新聞記事で、上水監督のことを絶賛している。「上水監督は学生を指導する上で一本の柱

があるが、引き出しが多くて柔軟性がある。人間性も深い。ものすごく影響を受けている」と……。名選手であった井上康生氏が全幅の信頼を寄せて絶賛する上水監督とは、どういう人物なのか、私も大いに関心を持った。最悪の事態を考えて想定する力や柔軟性、対応力、そして多くの引き出しを持ち合わせる力量は、どのような背景のもと、どのような努力のもとで身に付けていったのか、大変興味を持ったのである。私は上水氏の話の中で次のようなことがわかった。熊本県出身、小学5年で柔道を始め、入学した中学校で教諭をしていた父からは「道場では他人」と厳しく指導をされた。お父さんの話を聞くと、人間性は親譲りではないか、と私は思った。その後、最重量級の逸材として、強豪の神奈川東海大相模高校、東海大で主将を務めたが、28歳で引退するまで、個人戦では全国の舞台で準優勝や3位が多かった。自分の夢であった日本一世界一を果たせなかった口惜しさもあるが、一位になれなかった口惜しさを何回も何回も体験し、挫折を味わった。その口惜しさに加え、故障や病気にも悩まされたという。その後、米国留学も経験。米国で「人生はハプニングの連続である」というその時の体験がその後の想定力の背景の一つになっているという。現役時代を振り返り、すべては自分の準備不足と勝利への執念が足りなかった結果であると反省し、現在、理由や根拠の曖昧な練習を廃し、隙のない準備と内面の成長を促す指導を心掛けることに辿り着いたという。

「何か自分に良いところがあるとすれば、成功できなかった者の気持ちが分かることでは!!」と、さらりと言うところがにくい。

— 続く —



一人一人に的確な指導をする上水監督